

井上達三『国津神時代ニ於ケル徳島城山遺跡地』解題

長谷川賢二

はじめに

鳥居龍蔵が故郷徳島に残した足跡のうち、1922年（大正11）に行った徳島市城山貝塚の調査は代表的なものとして著名である。この調査には、笠井新也ら当時の代表的な郷土史家たちがかかわっており、徳島における本格的な考古学的調査の端緒を開いたものといわれている。また、調査に際して多大な貢献をしたことで知られるのが、当時徳島市議員であった井上達三（1867～1929）である。⁽¹⁾

鳥居龍蔵記念博物館には、井上によってまとめられた『国津神時代ニ於ケル徳島城山遺跡地』（以下、本資料とする）と題された帳簿1冊があり、常設展示されている。もっとも、展示では表紙だけを見せる形になっており、全体を通覧できる状態ではない。そこで今回、写真を掲載し、全容を公開することになった。詳細については今後の研究に委ねたいと思うが、ここでは本資料の概要と、これに収載されている「所感記」について紹介し、解題としたい。

1 概要

本資料は、表紙の向きを正位置とみると縦340mm、横176mmで、縦長に綴じられている。紙数は、表紙や白紙を含めて38枚である。内容は2部構成となっており、前半は井上自身によって採られた拓本と当該遺物の断面図やメモ（縦長方向13枚）、後半は「所感記」と題された考察である（横長方向11枚）。拓本に注記された年月日や内容から、城山貝塚調査にかかわった1922年にまとめられたとみられる。

前半部の拓本は、城山貝塚のうち1号貝塚（城山貝塚の各遺跡名は今日の通例に従った。⁽²⁾以下同様）の出土土器、3号貝塚、4号遺跡、城山内の旧豊玉比売神社跡の出土瓦等、1・3号貝塚で出土の「桃の笛」、1号貝塚で出土の石小刀や穴のある土器、細工のあるハマグリやアカガイの殻、4号遺跡出土の「祝部土器」（今日でいう須恵器）、城山外の土器として弘誓寺の裏（徳島市下助任町）で発見された土器が取り上げられている。

また、「所感記」は、井上が遺跡の性格について考察したレポートであり、彼の遺跡に対する見方や歴史観がよく分かる資料である。

本資料を残した井上について、改めて紹介しておきたい。⁽³⁾彼は汽船事業を経営した実業家、徳島市議員を歴任した政治家として知られる人物である。鳥居との関係は、独学で習得した写真撮影技術を活かして鳥居の生家の近隣で写真館を運営していたこと、その撮影技術をもって鳥居の朝鮮半島調査に同行したこと、徳島県内の遺跡調査に同行したことや城山貝塚発掘調査に参加したことが知られている。人類学、考古学、さらには郷土史における専門家として評価されることはなく、鳥居の協力者としてのみ理解されることの多い人物である。

そうした中で本資料は、井上の研究への理解や姿勢、彼の主体的な思考が知られる稀少なものといえることができ、注目すべきであろう。

2 「所感記」について

(1) 「国津神」への関心

資料全体の表題に「国津神時代ニ於ケル徳島城山遺跡地」とあるように、井上の関心の中心は、古い神々の時代の遺跡として城山貝塚周辺の位置づけを図ることにある。こうした方面に関心を向けた理由について「所感記」には、人類学の素養がないためという意味のことを述べているが、発想の根源は、鳥居が日本民族起源論として提唱した固有日本人説にあるとみられる。というのは、やはり「所感記」の冒頭に記された趣旨の説明において、鳥居の講演をきっかけとして「国津神調査」に関心をもったと述べているからである。

ここで、鳥居が城山貝塚調査以前にまとめた著書『有史以前の日本』(1918年)⁽⁴⁾について、とくに同書に収載された論考「古代の日本民族」を中心に参照し、国津神と固有日本人についてみておこう。鳥居は、先住民として石器時代の日本に居住していたのはアイヌだと考えた。そこへ渡来したのが、記紀神話に現れる国津神(地上の山野・河川などに住む神々)であり、天孫降臨以前からの土着の古い日本人であると考えた。これを固有日本人と名付けたのである。国津神=固有日本人は、北方民族が朝鮮半島や沿海州を経て日本に至ったもので、弥生式土器を使用したと想定でき、また、アイヌとともに石器時代から日本に居住したという。さらに、固有日本人と同系統の北方民族が後に金属器をもたらし、古墳を残した。この民族が天津神(高天原に住む神、もしくはそこから地上に降りて来た神)ととらえられていたものと理解でき、その渡来を天孫降臨神話の実態と考えていたのであろう。

鳥居は「国津神時代」という表現を用いたことはないが、井上が鳥居の説を踏まえているとするなら、固有日本人としての国津神が勢力を広げ、定着した時代という意味になるであろうから、弥生時代を中心に古墳時代までを含む時期を指すものと思われる。

なお、井上は、国津神時代と同義として「地神五代之時代」ともいっている。「地神五代」は天照大神以下、神武天皇以前に日本を治めたとされる5柱の神(皇祖神)の時代の意である。したがって、天孫降臨前後を通じて国津神時代とみていると考えられ、この点からも弥生～古墳時代を一括していると思われる。

(2) 国津神と城山

「所感記」の内容は、大まかには①国津神の遺跡としての城山についての考察、②城山貝塚自体の考察とからなる。ここでは、前者に関する記述についてみておきたい。

前節で述べたことからすると、井上は城山一帯について、固有日本人たる国津神の痕跡として関心を寄せたと思われるが、「所感記」の①にあたる記述は、そのような合理主義的なものではない。考古学・人類学的な考察を排除した「神」をめぐる観念的な理解から城山の性格について解釈を施していると読み取れる。

すなわち、「鳥居氏ノ帰京ノ後ハ小生多少ノ責任ヲ受ケテ調査シ続ケタルガ益々国津神ノ遺跡ナル事ヲ感シ」たとか、「其実地及其採集器一々ガ其等ヲ得タル所ノ国津神ノ遺跡ナルヲ思ノ余り或ハ天ノ石門ノ箇所ノ此城山ニハアラサルカト信スルナリ」と記しているように、国津神の遺跡であることを自明視して、城山を天の岩戸に比定するのである。天の岩戸というまでもなく、記紀神話において天照大神が隠れたという岩戸のことである。

比定の根拠について井上は、城山に天石門別を冠称する豊玉比売神社があったという点に求めている。そして、「天石門別」の冠称を伝えたのは、国津神時代の語り部たる「忌部ノ神」と述べる。なぜなら、岩戸開きのときに立ち会った中に忌部神がおり、この神が語ることは主として阿波国に残るはずという想定があるからである。また、忌部神と阿波との関係については、忌部神が阿波国に派遣されたこと、「人武天皇」以来、阿波国より代々の天皇に麻布等を献上したことなどを挙げている。さらに近年は、今上天皇(大正天皇)に麻布、穀物を送ったとも記している。これに限らず、「所感記」では忌部に言及していることが多く、「忌部時代」なる文言もみられる。井上は、忌部が古代阿波におい

て卓越した存在であったとみていたといえよう。

ちなみに、井上が私淑した、暦学者の工藤茂三郎（1854～1924）⁽⁵⁾などは、後述する阿波忌部ゆかりの麻植郡に含まれていた吉野川市鴨島町在住であったためか、「自分之忌部氏家敷地ヲ自分住居地ナリトマテ述ヘシ事アリ」という有様で、忌部と自身のアイデンティティを直結させていたらしい。その意味で、忌部への関心は、井上固有のものではなかったといえる。

ここで忌部について触れておこう⁽⁶⁾。井上は、忌部ないしは忌部神を一元的にとらえているが、今日理解では、「忌部」は、天太玉命を祖とする古代の朝廷祭祀を担った忌部氏（中央忌部氏）と、太玉命に従属した諸神を祖とする部民集団である地方忌部とに区別されている。阿波忌部は後者に含まれるもので、天日鷲命が祖神であった。太玉命の末裔である天富命に率いられて阿波に入ったという。古代から近代まで続いた麻植郡（中世まではおおむね麻殖と表記）の名称は、阿波忌部の拓殖に由来すると伝えられている。これらの点は、忌部氏の伝承がまとめられた『古語拾遺』が史料として知られている。

『古語拾遺』や『延喜式』といった史料によれば、阿波忌部は天皇の即位儀礼である大嘗祭に際して、籠服などを貢進していたことが知られ、『仲資王記』などの古記録からも、中世初期にも阿波に神祇官配下の忌部集団がいて大嘗祭に奉仕していたことが確認されている。しかし、やがてこの奉仕は断絶し、戦国期から近世初期にかけては大嘗祭自体が行われなくなった。そして、大嘗祭が復興されても阿波からの奉仕は途絶えたままだった。明治時代後半、阿波忌部の大嘗祭奉仕を「再興」しようとする運動が起こり、その結果、1914年（大正4）に行われた大正度大嘗祭に際し、徳島県で籠服を調進することになったという経緯があった（古代の籠服や儀礼の実態は不明であり、実質的には「創造」であった）。井上が記している大正天皇への麻布等の送付の件は、この動きを指している。そして、大嘗祭への奉仕の「再興」が徳島県に名誉意識を残すことになり、また、阿波忌部の存在をクローズアップさせることになったとみられる。大正期以降、阿波忌部こそが阿波の歴史の原点であるかのような、いわば忌部強調史観が定着していったのである。井上が忌部を卓越した存在とみたのは、大嘗祭にかかわっての、この時期の郷土史理解と関連したものと思われる。

(3) 城山貝塚

ここでは、前節で挙げた②の点に関する記述内容を見ておこう。結論的にいうと、この部分は神話に即した理解ではなく、考古学的な検討に終始している。

1～3号貝塚、4号遺跡について、3・4号を甲、1・2号を乙と区分して、甲・乙では、出土遺物が異なること、「地平線カ違フ」ことを時代差として理解している。遺物については、甲は「弥生式ノ土器ト石器」が、乙は「アイヌ式ト称スル土器」（縄文土器）が、それぞれ発見されており、後者が「尤モ古キ時代時下ノ底ニアル事」としている。また、「地平線」の違いについては、「乙式ヶ所ハ古クカラ住メルガ甲式ヶ所ハ乙トクラベルト時代カ違フト思フ」と述べている。

さらに、土器や人骨など出土遺物の検討がなされ、甲・乙の時代差を民族の相違とも位置づけている。いうまでもなく、乙はアイヌを担い手とし、甲の担い手である後来の民族の出自は「或ハ朝鮮テハアルマイカ」としており、明らかに固有日本人説に通じる。また、「忌部連ノ中ニ百済カアリ」などと具体的な言及もみられ、国津神の遺跡としての議論につながる考え方がうかがえる。

このように、井上は城山貝塚を縄文時代から弥生時代の遺跡として理解したことが知られるのである。

ちなみに、鳥居が城山貝塚について報告した「徳島城山の岩窟と貝塚」⁽⁸⁾では、全体的にはアイヌの遺跡とみなしているものの、3号貝塚については、「アイヌ臭い」ものが発見できたと述べる一方、ドルメン式巨石遺構を発見したとしており、これについては、「穴の中に住って居った人間よりも、少し後の人間が残したもののように思われる」と述べている。遺構が貝塚の上に築かれているようにみえること、「固有日本人の古い弥生式系統のもの」が出土していることから、「時代の相違」が感じられるからというのである。井上より細かい検討がなされており、3号貝塚の位置づけ自体は異なるた

め、関係者の認識が必ずしも一致していなかったと思われるが、城山貝塚が縄文時代から弥生時代にかけての遺跡として理解できる部分もあるととらえられていたという意味では共通しており、あわせてみておくべきものであろう。

おわりに

以上、「所感記」を中心にして、本資料についてごくかいつまんで紹介した。今後の研究に裨益するなら幸いである。

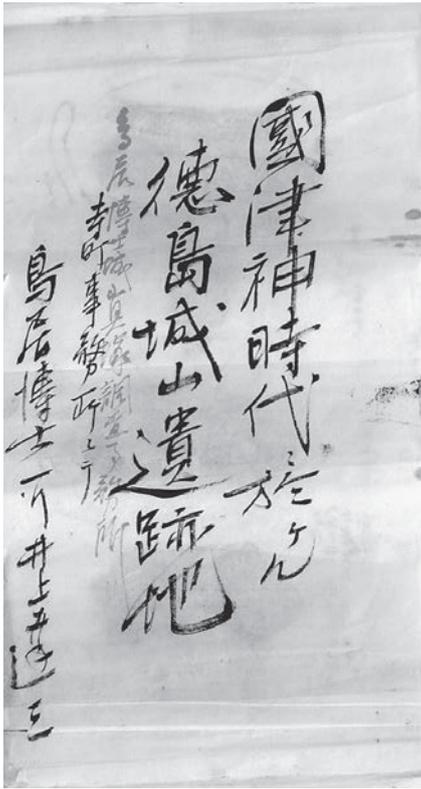
なお、「所感記」の内容を理解するに当たり、部分的に鳥居による記述を参照したが、ともに調査に参加した笠井新也、前田正一や森敬介の見解⁽⁹⁾などと比較し、当時の郷土史家らの認識を把握することも必要であらう。ここでは課題の指摘にとどめて擱筆する。

注

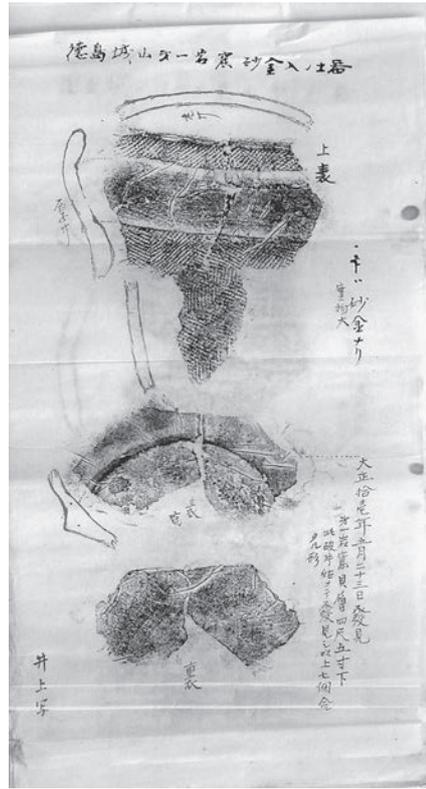
- (1) 井上達三の城山貝塚調査における役割については、天羽利夫や原多賀子の記述（天羽 1994, 原 2009）が詳しい。
- (2) 4号遺跡は貝塚としての性格をもっていないことから、貝塚とは呼称されていない（天羽・岡山 1985, 天羽 1994）。本稿では、こうした通例に従ったが、鳥居龍蔵記念博物館所蔵の城山貝塚調査関係写真の裏書には4号貝塚とされたものがある。
- (3) 井上の経歴については、佐藤正志や石尾和仁による記述（佐藤 1994, 石尾 2009）を参照した。
- (4) 『鳥居龍蔵全集』1（鳥居 1975）に収載されているが、これの底本は1925年刊行の増補改訂版である。初版（鳥居 1918）は、国立国会図書館がWEB上で公開している近代デジタルライブラリー（<http://kindai.ndl.go.jp/>）で閲覧できる。
- (5) 工藤の経歴については、逢坂俊男による記述や『鴨島町誌』（逢坂 1994, 鴨島町教育委員会 1964）を参照した。
- (6) 阿波忌部については、古代には王権への奉仕、中世にはその末裔を称する集団の動向、近世から近代にはかつての式内社であった忌部神社（阿波忌部の祖神である天日鷲命を祭神とする）の所在をめぐる問題等において、注目される。詳しくは、天羽利夫、丸山幸彦、筆者の研究（天羽 1978, 丸山1989・2004・2008, 長谷川 1993・2000・2010）を参照されたい。本稿で触れた大正度大嘗祭と忌部強調史観に関しては、拙稿（長谷川 2010）における見解をもとにした。
- (7) 井上は、阿波忌部の奉仕について、麻布と穀物の献上というが、穀物は『古語拾遺』にみられる穀の誤読と思われる。
- (8) 初出は1923年（『教育画報』16巻5号）。ここでは、『鳥居龍蔵全集』4（鳥居 1976）収載のものを参照した。
- (9) 笠井新也については近年、発掘記及び解題が公開された（笠井 2010, 湯浅 2010）。また、前田正一や森敬介の関係資料は、徳島県立図書館が所蔵している。森の遺稿のうちの一部については、新孝一による紹介が公開されている（新 1983）。なお、戦前から戦後に活躍した郷土史家として著名な飯田義資は、1966年（昭和41）の徳島県立図書館創立50周年記念講演において、森が1927年（昭和2）に、徳島城跡の徳島公園内にあった県立光慶図書館における「石器時代出土品」展を手がけたと述べている（飯田 1987）。城山貝塚出土遺物の展覧会であったことは想像に難くない。1930年代には、郷土史家の小川国太郎らを中心に、これら出土遺物等を展示する博物館建設の構想がみられたこともあった（長谷川 2001）。

引用文献

- 天羽利夫 1978 「阿波忌部の考古学的研究」『徳島県博物館紀要』9
- 天羽利夫 1994 「城山貝塚」「徳島城」編集委員会編『徳島城』徳島市立図書館
- 天羽利夫・岡山真知子 1985 『徳島の遺跡散歩』徳島市立図書館
- 原多賀子 2009 「徳島と鳥居龍蔵」一山典還暦記念論集刊行会編『考古学と地域文化』
一山典還暦記念論集刊行会
- 長谷川賢二 1993 「『伝統』の創造と再生産」森栗茂一編『都市人の発見』木耳社
- 長谷川賢二 2000 「式内忌部神社所在地論争における古代・中世へのまなざし」
徳島地方史研究会創立30周年記念論集刊行委員会編『阿波・歴史と民衆』3
徳島地方史研究会創立30周年記念論集刊行委員会
- 長谷川賢二 2001 「戦前期徳島における博物館事情」『博物館史研究』11
- 長谷川賢二 2010 「神・天皇・地域」由谷裕哉・時枝 務編『郷土史と近代日本』角川学芸出版
- 飯田義資 1987 「光慶図書館の回想」徳島県立図書館編『徳島県立図書館七十年史』徳島県立図書館
- 石尾和仁 2009 「鳥居龍蔵と徳島」『史窓』39
- 鴨島町教育委員会編 1964 『鴨島町誌』鴨島町教育委員会
- 笠井新也 2010 「城山貝塚発掘記」『青藍』7
- 丸山幸彦 1989 「古代から中世にかけての種野山の形成過程」『徳島県立博物館開設準備調査報告』3
- 丸山幸彦 2004 『在村国学者・儒学者の阿波古代史研究についての史学史的研究』（科研費報告書）
- 丸山幸彦 2008 「伝承の世界から史実の世界へ」『史窓』38
- 逢坂俊男 1994 「工藤茂三郎」徳島新聞社編『別冊 徳島県歴史人物鑑』徳島新聞社
- 佐藤正志 1994 「井上達三」徳島新聞社編『別冊 徳島県歴史人物鑑』徳島新聞社
- 新 孝一 1983 「徳島県立図書館所蔵の森敬介氏資料」『徳島考古』1
- 鳥居龍蔵 1918 『有史以前の日本』磯部甲陽堂
- 鳥居龍蔵 1975 「有史以前の日本」鳥居龍蔵『鳥居龍蔵全集』1 朝日新聞社
- 鳥居龍蔵 1976 「徳島城山の岩窟と貝塚」鳥居龍蔵『鳥居龍蔵全集』4 朝日新聞社
- 湯浅利彦 2010 「『城山貝塚発掘記』解題」『青藍』7



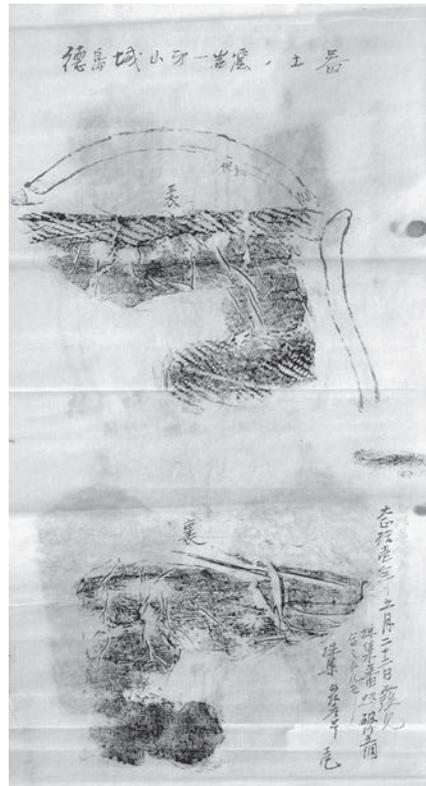
1



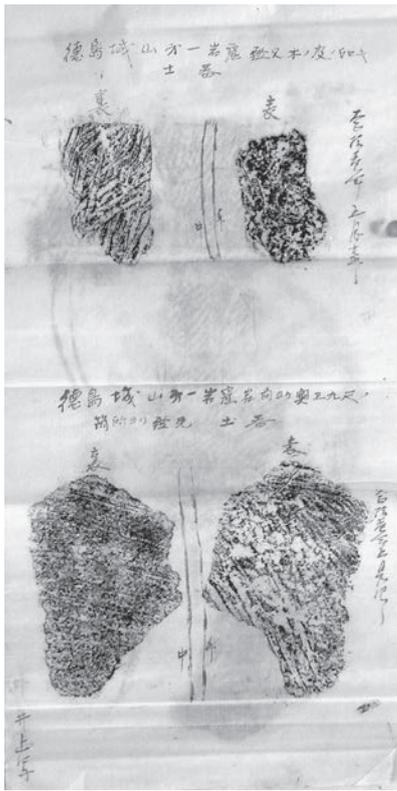
2



3



4



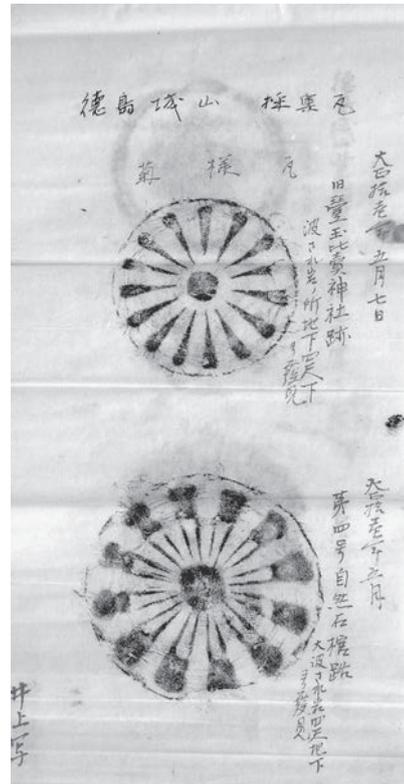
5



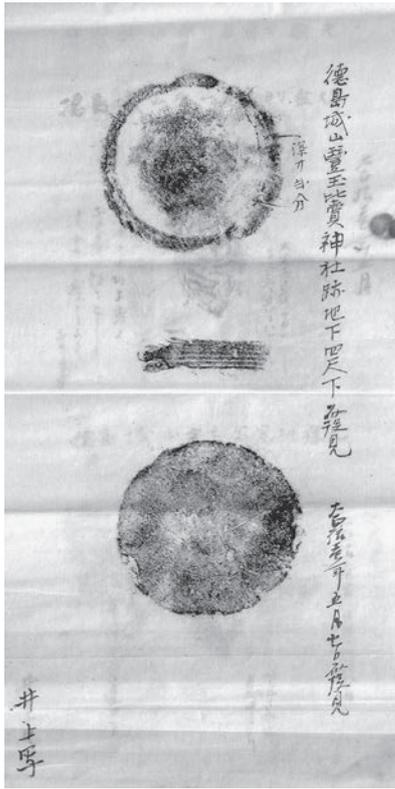
6



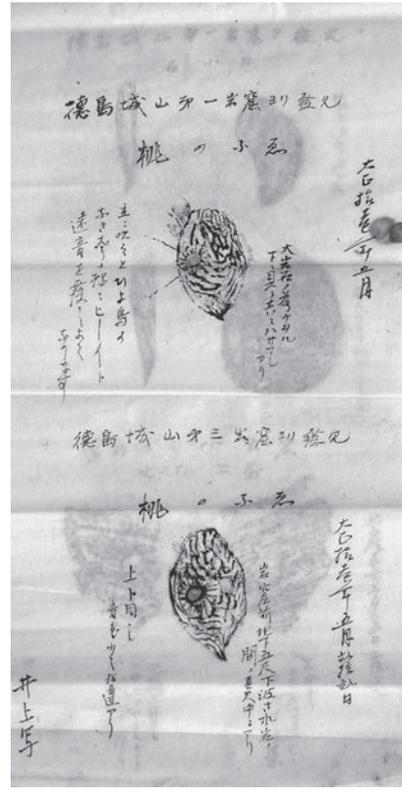
7



8



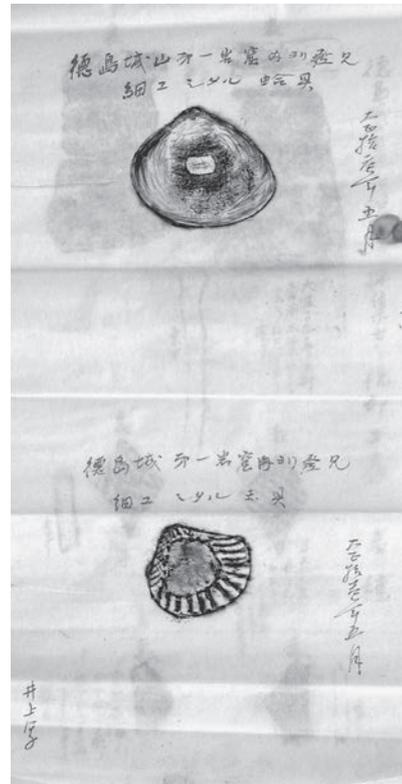
9



10



11



12

多岐路の神皇ノ御
 少皇ノ御イテ皇化ノ多キニ
 調至シ臣々タルガ益々同
 津神ノ遺跡ノ人ノ感
 地神五代ノ時代ナルト思
 下ノ并ニ必意ヲ以テ地調至
 ヲ改セリ
 少皇ノ御世ノハ○シ
 別トシテ所限國ノ事トシ
 國津神時代ヲ以テ後
 子ヲ書ク見ケイ
 阿波國ノ始ノ親左ノ
 子孫茂リテ中ノ數年前
 子トシテ國ヲ中ニ或
 道ニ所波キ然ルニ國書
 ニアリ又ニ存也ニ曆法
 改正ノ附ニ左キ本ニ持テ
 多ト書文字ノ意義我ク
 説明ニルニ不ニ其由矣
 久ハ咄シテ聞クムリ
 之レニ存也或ハ忌部

16

遺跡ノ人ノ書數ノ見ルハ
 同ノ内方ニ忌部ノ家敷地
 子自ニ任居地ナリトマテ述
 してマリ
 之レトニカクモ忌部連人
 早雲家ノ人書ニ依リ阿波志
 子ノ所限國ニ社者禮ニ依
 此城山調至キ得ル石者
 其上ノ見地キ見レハ其空也
 存其碑集集是也一カ其草
 子存先ト所津神ノ
 遺跡ノ人ノ思ニテ或ハ
 天ノ石門ノ所ノ此城山
 ニアニナカト信ニルナリ
 分一勤カクン証據ハ此城山
 一程至比皇神社アリ荒玉宮
 トシテ祭リタリナリ
 北神ニテ天在門別
 カカラシクハ何者生シタ
 カ何人ノ附ニタリナリカ
 思ハ

17

曆史ニ依リ何天皇ノ時ハ
 神ヲ語り部カ語りタル
 可ハ此神ノ是神代元
 トガナリ居ルモナラシ
 阿波國ハレシ忌部神
 語り部ノ不ニ同津神
 代ニ於テハ忌部神ノ説
 任ノ在門同ヤノ時ノ居タ
 ル人ト云ヘリトカク忌部神
 カ語り部ナリテ語りタリ
 立トシテ阿波國ノ跡ルハ平
 管アリ忌部神ノ阿波國
 別大八州時代ニ浪遣セ
 ラレタルハ其後皇ノ代
 天皇以テ所限國ノ
 代々ニ天皇ノ麻布ノ穀物
 ヲ奉ルナリテナセシムル阿波
 志ナリ其後應仁天正ノ亂
 一護州ヲ度部中村ノ浦ニ
 ル其後此部中村ノ浦ニ
 布穀物ヲ奉ルナリヤリ

18

信彦五式ノ土層ト石層トナ
 アルヲ是ヲ分チテ西所カラ西
 方ニハアイヌ可ト稱ス土層力
 不モ古キ時代時下層ニナル
 甲 方多ク之ル岩空層
 方四 自然石堆
 乙 方 是モ岩空層日ニ梅
 分ハ人骨具梅
 之レテニニ方ケテ見ルト地平
 線カ差違フ乙方ケ所ニ古リカラ
 住ルガ甲方ケ所ニ乙トクズベ
 ルト時代カ差違フト思フ又此
 ルモモ許生式ヲ考ヘテ
 註明スル
 然ル共ニ人類ガ立ルキル時ハ
 同時ニ大地レシノ時代ニ比
 立ルキルモノナリ
 ニツホ先挑ノ工カ先
 地下ヨリ出テ上ノ具
 ト岩ノ方ヨリ出テ先ノ思フ

22

之モ既チ其水カ沼ナリ城山ノ
 岸ニシテ其沼ニ先ルモノ
 岩空層亦四カ所ニ梅井ナリカワ
 カルニ其中心出(河下)出ルモノ
 ハ忌部時代ノ土層ト称スル
 乙 方 是モ岩空層ノ土層ハ平皮ニ
 作り先アノモノ如キモノナリ
 キル 梅ニ思フ
 又石層如キモノ自然石層用
 テ大陸ヲ渡ルモノト連
 フト思フ
 又現在ニ見ルモノ分ニ骨
 具等(古モノ)ノム骨ノ
 如キ自今ノ骨ニ先下ニ族ノ
 死骸ヲ埋メタル時代ニ在リ
 又分ニ分三ト民族カ差違フ
 多ク無論ト思フ
 牛ノ骨等ハ其年ノ人
 其後ニ入ル人ノ何方カ
 来タリシカ可ク朝鮮ト
 ハマイカ

23

忌部(臣)ノ地ハ百濟カ
 後祀ナリ居ル 燒物漸
 其ノ感興永樂ナリ人ナリ
 ナイカト思フ
 岩少し去ッテ見タイ
 城山渭澤渭ノ山ニ上テ井上
 ヨリ岩奔シ先ト神代ノ卷
 ニ入リ
 然ルニ北井ハ何所ナカ小生ハ
 流ルモノノ旧ニ思フ北所
 尤上古時代ニシテ林ニシテナ
 淵ノ先モト思フ地多ク金ヲ
 生スルモノ自然ノ上多ナリ
 且ク流ルモノソクナリヨシコ
 踊ル歌ニモ其ヲモカケアリ
 今面自テ出アリ 祖谷ノ山中
 小橋カ所ノ口ハ如何ナルモノト
 聞キタル事ナリ 卷ニ西方ノ
 箱ニテ首迄立ト去ト小橋ハ内リ
 ナリ 甚シハ池ナリ フロニ幸稱
 下ヨリテテケ去
 現在ノ井戸ハ甚シイナリ
 池ノ多ク上トシテ先ト云フ
 多ク朝鮮北ノ多ク朝鮮古
 夕ニ死リ井戸作ラサレ

24

かしらりし秋風ニシテ知事
 本布教官ノ島ヲ批ルル者
 美人ヨリナリテホコシリ
 大正拾陸年八月廿七日市
 神田町後手ノ兵庫堂ニテ
 滴羽幸徳カノ用シヤウ明ケ
 テクシト云フニテハ生ガ隠辰
 所ノ吾ノニ産産家カラン子
 幸々ニ東前田御下初亥ハ
 ンマシガ抜入ヨリ本ハ明リ
 近ニ是類モ全邦ヲ取テ
 台居傳古城山具海調也
 予皆所トシシ一洞ヲカマエ
 マシヤ
 而長ヲ持取改メテ
 不度ニテハ皇族持方
 ニ所口濱ノ所ニ思ハル
 テ共ニ坑ニ考テ一ツモト
 思ヒ記ス力ヨセト云フニ私
 ハ此記録ヲ送ル
 ニテリマシヤ

25

(25と26の間に白紙 7 枚)



26